生分解性マルチで効率化

千葉県匝瑳市
佐瀬洋樹さん

片付け作業の軽減
収穫時期を逃さない

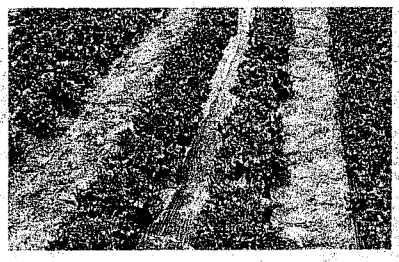
千葉県匝瑳市の農事組合法人佐瀬ファーム（佐瀬洋樹代表）は、米を中心にピーマン、レタス、トウモロコシなどを栽培している。6年前から導入している生分解性マルチフィルムは、今や野菜の周年栽培計画を正確に遂行するための資材として欠かせない。生分解性マルチで効率化、省力化を実現し、今後もさらなる規模拡大を目指す佐瀬さんを取材した。

千葉県の北東部に位置し、緑豊かな恵まれた自然と歴史を有する匝瑳市。北部は合津田が入り組んだ複雑な地形の台地部となっており里山の自然が多く残され、南部は平坦地で市街地を除いてほとんどが田園地帯となっている。

九十九里海岸に面し、一年中温暖で冬は暖かく夏は涼しい気候の匝瑳市で米を中心にレタス、ピーマン、えだ豆、トウモロコシなどを栽培している農事組合法人佐瀬ファームの佐瀬洋樹さん（41歳）は、家族4人とパート及びベトナムからの研修生の6人でおよそ38㌶の農地を管理している。

父親の佐瀬安洋さん（左）と洋樹さん、親子二代で営む

代々続く農家を継いだ佐瀬さんは、高校卒業と同時に就農し、父親の安洋さんと共に農業を続けてきた。12年前に法人化して以降、委託や借り入れなどで農地を増やし、現在は同法人の代表を務め、米28㌶、レタスなど露地野菜2㌶、ピーマンなどをハウス1㌶で栽培している。


生分解性マルチをサニーレタスにも使用している

生分解性マルチはトウモロコシを中心にえだ豆、落花生の一部などに使用している。「マルチのメリットは片付けに対する労働力、手間、時間を省けること。次の作業にすぐに取り組めるため、大変助かっている。コスト的にも、人件費や処理費など相対的に考えると通常のマルチと変わらない」と洋樹氏。

トウモロコシは2月下旬から4月中旬に播種し、6月中旬から7月下旬に収穫する。6月はピーマンの収穫及び出荷作業が重なるため、トウモロコシの収穫後はすぐにピーマンの収穫作業に取り掛からなければならない。「収穫時期を逃すと品質が落ちたり、夏の暑い時期に収穫作業を行わなくてはならないため、ピーマンにも作業スタッフの身体的にも厳しい状況になる」と、マルチを剥がし、処理する必要のない生分解性マルチは、作業の効率化・省力化に大きく役立っている。

トウモロコシの収穫後に耕うん機で鋤きこんでおけば、9月下旬のレタスの定植までの約3カ月間で土に分解されるため、スムーズに次の栽培に移行できる。「もともと輪作の一環でトウモロコシを栽培しているため、効率的な耕作スケジュールが組める」と生分解性マルチへの信頼も厚い。

佐瀬さんが生分解性マルチを導入したのは約6年前で、出荷組合からの紹介だった。以来、様々な作物に試験的に採用し、現在に至る。

昨年6月からは落花生への導入を始めた。「初期の生育促進が目的だが、落花生の場合は生育途中でマルチをはがす必要があり、通常のマルチだと幹をひっかけて傷つけてしまったり、引き抜いてしまうことがある。生分解性マルチは分解し、剥がしやすくなっているため作物の品質を保つことができる」と効果を実感している。

現在佐瀬さんは自分の土地での栽培の他、近隣の農家に向けた苗づくりや約5㌶の委託作業を行っており、特に委託作業は年々広がりつつある。

「現在の人数、農機、施設の規模ならば、40㌶くらいまでは行える」と、規模拡大には前向きだ。

昨年の台風15号では、強風で3連棟のハウスがつぶされ、大きな被害に遭った。骨組みだけが残ったハウスは自分たちでフィルムを張り、サニーレタスやリーフレタスなどの葉物野菜の栽培を行っている。

今後も「常に安定した収入が得られる農業を目指す」佐瀬さんにとって、効率化、省力化を実現する農機や資材は重要である。

規模拡大のためには効率的なスケジュールを計画的に実行する必要があり、今後も生分解性マルチは欠かせないものとなるだろう。